

実務経験のある教員等による授業科目の一覧表

2025年度 葵メディカルアカデミー 理学療法科

(省令で定める単位数等の基準数相当分)

科目名	時間数	年次	担当者	実務経験を活かした授業内容
基礎理化学	60	1年	山野井 裕子	医学を学ぶスタートに当たり、人体の大まかなしくみを知ること目標とする。理学療法士は運動器（骨、筋肉）の専門家であるが、運動器をコントロールするのは神経であり、栄養を得るのは消化器、酸素を取り入れるのは呼吸器、これらを血液に乗せて身体に送るのは循環器の働きによる。従って学生は、運動器とそれに関わる身体のしくみを幅広く学習する必要がある。ここでは特に、内臓と運動の関りを学部ことを目標とする。理学療法士として病院・介護保険施設で20年間勤務した経験に基づき講義を行う。
医療概論	30	1年	持田 誠	理学療法士として10年整形外科系病院で勤務した経験から医療と基礎医学の関連について学ぶ。また疾病の成り立ちについて理解するとともに、主な疾患についての概念を深める。
コミュニケーション論	30	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、社会で必要とされるコミュニケーション能力と理学療法を学ぶなかで必要とされる基本的な文書作成について学ぶ。また一般的なマナーを学び実践しながら理解を深めていく。
心理学	30	1年	井古田 大介	臨床心理士・公認心理師として精神科・心療内科病院13年の実務経験を活かし、人間理解の方法を心理学的観点から解説する。演習形式を取り入れながら、幅広く学び、科学としての心理学の持つ方法論、研究内容、日常生活への応用などについて理解を深める。また、さまざまな心理アセス
人間発達学	15	1年	小松 昌久	理学療法士として35年間、一般病院等での小児領域に対するリハビリテーションの経験を活かした講義で、子どもの発達を通し運動獲得の過程を学び動作獲得のための運動療法実施のための背景に役立つように学習を進める。運動獲得と心身の成長について学び関わり方について説明できるようになる。
基礎運動学	60	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、筋骨格・関節運動学などの基礎的知識から、人の基本的動作の構成について解剖学、生理学、その他の基礎医学での知識を統合して学習を進めていく。前半では主に関節の構成、関節の運動を学ぶ。後半では動作での関節運動の記載方法から支持基底面や重心の関係、力学的な分析を行う。

医療基礎統合論	60	1年	山野井 裕子	1年次に各種人体構造学で学んだ解剖学、生理学の基礎的な知識と、各種障害学の知識とを統合し、疾患に対する総合的な理解を図る。理学療法士として10年以上、病院や介護施設等で勤務した専任教員が経験を活かした授業を行う。
人体構造機能学Ⅰ	30	1年	持田 誠	理学療法士として10年整形外科系病院で勤務した経験から理学療法を行なうためには、人体に関する必要な知識を学ぶことは必要不可欠である。そこで本講義では、人体についての概観を理解した後、主な感覚系等のメカニズムを学習する。
人体構造機能学Ⅱ	30	1年	小池 武則	人体には内臓器・血管・神経・骨・骨格筋などから構成されているが、それぞれの位置を知るために基準となるのは骨である。本科目では理学療法士として整形外科病院にて十二年勤務した経験から、理学療法士の視点で骨を捉えていく。また、理学療法士が対象とするのは運動であり、運動は関節で起こる。本科目では関節の名称および一般的な構造と機能についても学んでいく。
人体構造機能学Ⅲ	30	1年	高澤 洋二	理学療法士としての19年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、神経系の構造から、正常な神経の機能や役割について理解を図る。脳の各機関の役割や局在性を理解し、運動と神経生理学のつながりを理解する。
人体構造機能学Ⅳ	30	1年	山野井 裕子	人体構造（解剖）・人体機能（生理）の理解は、理学療法を行う上で必須である。この授業では、内部障害に関連する解剖学・生理学の知識を体系的に理解し、2年で学習する内部障害理学療法の知識に結びつけられるようにすることを目標とする。理学療法士として病院・介護保険施設で20年間勤務した経験に基づき講義を行う。
人体構造機能学Ⅴ	30	1年	持田 誠	理学療法士として10年、整形外科系病院で勤務した経験から理学療法を行なうためには、人体に関する必要な知識を学ぶことは必要不可欠である。そこで、本講義では消化器・泌尿器系統を理解するとともに代謝の理解に努める
人体構造機能学演習	60	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、人体構造機能学で学んだ骨・靭帯・筋・神経・動脈について、模型のデッサンや触診技術を通じて、周囲の組織との位置関係をより深く学んでいく。また、触診を演習するに至っては、理学療法士としてのコミュニケーションの一端も学んでいく。

基礎病態論	30	1年	持田 誠	本授業では病態、すなわち病気になったとき身体の正常な構造（解剖）・機能（生理学）がどのような状態になっているのかを学習する。病態の理解は、理学療法を実施する上で重要である。理学療法士として病院・介護保険施設で20年間勤務した経験に基づき講義を行う。
臨床心理学	30	1年	井古田 大介	臨床心理士・公認心理師として精神科・心療内科病院13年の実務経験を活かし、人間理解の方法を心理学的観点から解説する。理学療法士として多様な精神疾患を抱える患者と向きあうためのアプローチ方法を身につける。
整形障害論	60	1年	小池 武則	理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から、臨床実習前に知るべき整形外科疾患について、病態・検査・治療法を関連付けて解説していく。
内部障害論	60	1年	山野井 裕子	内部障害とは身体内部の障害のことである。本授業では、理学療法を実施する際に必要となる内科疾患について学習する。理学療法士として病院・介護保険施設で20年間勤務した経験に基づき講義を行う。
神経障害論	60	1年	高澤 洋二	理学療法士としての19年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、各論として脳血管障害と神経筋疾患を中心にその病因・病態・治療・予後について理解を図る。
発達障害論	15	1年	小松 昌久	理学療法士として35年間、一般病院等での小児領域に対するリハビリテーションの経験を活かした講義で種々の疾患の発症要因と病態を理解できる。また、頻度の高い小児疾患の病態と疾患の特徴を理解し、それらに対する対応を系統的かつ全人的に学ぶ。さらに、障害を有した小児に対する医学的な評価法と理学療法の概略を学ぶ。小児期の各疾患治療・療法を通じてチーム医療の重要性を学ぶ。
老年学	30	2年	持田 誠	理学療法士として10年、整形外科系病院で勤務した経験から理学療法を行なうためには、加齢に関する必要な知識を学ぶことは必要不可欠である。加齢とともに変化する身体機能、精神機能を整理し、疾患像をイメージできることを期待する。
リハビリテーション概論Ⅰ	30	1年	小川 紀子	保健・医療・福祉の専門職である理学療法士として業務を実施するために必要な、リハビリテーションの理念、社会保障制度について理解する。また、理学療法を受ける患者や利用者の様々なニーズに対して対応できるように、保健・医療・福祉の各領域についての法制度の動向やサービスの内容を理解する。理学療法士として病院及び老人保健施設に15年勤務した経験をもとにした授業である。

多職種連携論	30	1年	小川 紀子	患者・家族にとって最適の医療を効率的に提供するためには、職種間協働にもとづく「チーム医療」の推進が必要である。講義では、医療の枠にとらわれず、これから健康・医療・福祉の専門職を目指すものとして、対象者を中心としたチーム医療の意義、多職種間のコミュニケーションの知識・技術およびその重要性を学ぶ。理学療法士として一般病院5年間、介護老人保健施設10年間の実務経験を活かした授業である。
生活環境論	30	1年	小川 紀子	生活環境は、障害の有無に関わらず人が生きていく上で最も身近で、基本的に存在するものである。障害者や高齢者が、回復・維持された身体機能を有効に活用するためには、社会的環境に広く目を向けることは重要である。生活環境論では、そのための基本的な理念と知識について学習する。理学療法士として一般病院5年間、介護老人保健施設10年間の実務経験を活かした授業である。
運動療法総論	30	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、新人理学療法士として勤務する上で必要と思われる運動療法の基礎的な原理と方法を学ぶ。
臨床運動学	30	2年	臂 貴紀	理学療法士として一般病院・訪問看護ステーション・デイサービスにて12年間の実務経験を活かした授業で、リハビリテーションの臨床現場では力学的に物事を考え、臨床意思決定を行う機会が多くあります。例えば動作の介助や誘導のキーポイントを考えたり、異常動作の原因を推論することが重要となります。そのため、臨床的に用いられる観察を中心とした運動分析、動作分析を講義を通して学習する。
理学療法管理学	30	3年	小川 紀子	理学療法士は、院外、施設外に視野を広げ地域全体のリハビリテーションに関わる機会が多くなるため、その拠点となるリハビリテーション科の組織を強化していかなければならない。5年間のリハビリテーション管理職経験を持つ教員と臨床で働く現職管理職理学療法士を外部講師に招き、組織の能力を最大限に発揮させるための具体的な管理・教育について系統的に学び、リハビリテーション部門の管理について理解を深める。
理学療法評価学	60	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、理学療法の一連の流れにおける評価の位置づけを説明し、評価の意義・目的について理解する。評価方法の種類や主な検査測定項目を学ぶ。本講義では関節可動域測定、Danielsらの徒手筋力検査、四肢長・周径を中心に実施し、その検査の目的や結果の解釈について理解する。

理学療法評価学演習	120	2年	高澤 洋二	理学療法士としての19年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、理学療法の一連の流れにおける評価の位置づけを説明し、評価の意義・目的について講義する。評価方法の種類、主な検査測定項目、評価結果の記録・解釈について説明する。また、各種の評価結果を統合・解釈する方法を学び、疾患の症状について理解を深める。
理学療法評価技術論	120	2年	小池 武則	整形障害・神経障害・内部障害の臨床を5年以上経験している講師による授業で、それぞれの障害に適応させた検査・治療方法を講師によるロールプレイをもとに学ぶ。また、検査結果の解釈や、他情報との照合による患者像の把握、それをもとにした問題点抽出・目標設定を複数の症例を検討しながら学んでいく。
整形障害理学療法	60	2年	小池 武則	理学療法士として整形外科病院にて十二年勤務した経験から、新人理学療法士として勤務する上で必要と思われる理学療法の展開法について授業する。具体的には整形障害領域の理学療法評価の意味と、理学療法プログラムの選択について、機能形態学・運動機能学の観点から説明ができるようになることを目的とする。
神経障害理学療法	60	2年	高澤 洋二	理学療法士としての19年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、解剖学・神経内科学で学んだ中枢神経疾患に関する知識を整理・再確認をし、さらに理学療法との関係や意義を理解する。また中枢神経障害病態生理を理解し、機能回復のための基本的な理学療法についての知識を身につけることを目標とする。
内部障害理学療法	60	2年	山野井 裕子	近年、生活習慣病を基盤とした内部障害系疾患は増加の一途をたどっている。内部障害は文字通り、その障害が外から見えにくいいため、病態の理解が重要となる。本授業では、担当者が理学療法士として病院・介護保険施設に20年間勤務した経験に基づき、呼吸器・循環器・代謝疾患の病態を理解し、リスク管理を行いながら適切な理学療法を行えるよう講義を行う。
物理療法	30	2年	高森 正祥	理学療法士として整形外科病院、一般病院、大学病院にて8年間の実務経験を活かした授業で、基本的な物理刺激が、物理療法として人体にどのように働くのかを理解し、各治療法の適応・禁忌・注意点を理解する。各治療機器を用いて実習を行い、治療を行えるようにする。

義肢・装具学	30	2年	時田 幸之輔	理学療法士として総合病院5年間の実務経験を活かした授業。義肢・装具が十分な機能を発揮し、患者のADLが向上するためには、各職種間のコミュニケーションが重要であることは言うまでもない。義肢・装具について医師や義肢装具士などと十分な議論を交わすことのできる能力は、作成する能力以上に求められる。授業では、様々な義肢・装具の適応と特性について理解することを目標とする。
理学療法技術論Ⅰ	180	3年	臂 貴紀	一般病院・クリニック・老人施設などで5年以上の経験を有する教員により理学療法士として必要とされる知識を総合的に学習し、臨床実習にて経験・関わることの多い運動器疾患や呼吸循環器疾患、脳血管障害、神経筋疾患について、その基礎医学や臨床医学に基づいて症状や現症や日常生活を理解する。それらの疾患についての評価方法や理学療法専門領域について理解する。また理学療法全体を通し
理学療法技術論Ⅱ	180	3年	臂 貴紀	一般病院・クリニック・老人施設などで5年以上の経験を有する教員により理学療法士として必要とされる知識を総合的に学習し、臨床実習や理学療法技術論Ⅰでの学習を活かし、理学療法の専門領域である物理療法や装具学などについて改めて理解を深める。また理学療法適応患者さんに多い合併症への対応力や小児等の幅広い疾患に対する理解を深める。
理学療法技術論Ⅲ	180	3年	臂 貴紀	一般病院・クリニック・老人施設などで5年以上の経験を有する教員による講義で、3年間の講義や臨床実習での学習を活かし、理学療法士として求められる基本的な資質・能力を理解し、社会と理学療法士の役割を理解する。また今後臨床で関わる疾患の基礎医学、臨床医学を理解し、それらの理学療法専門領域について考えることができる。
日常生活活動学	60	2年	小川 紀子	日常生活活動（ADL）は、障害者・高齢者が生活をする地域社会、在宅生活の環境の中でQOLに密接に関わるものであり、リハビリテーションにおける重要な概念である。その概念とQOLについて理解し、各疾患毎のADL指導の実際について理解を深める。理学療法士として一般病院5年間、介護老人保健施設10年間の実務経験を活かした授業である。
地域リハビリテーションⅠ	15	2年	菊地 裕美	理学療法士として5年以上の経験に基づいて、地域リハビリテーションの理念、歴史を理解し、介護保険法や関連法規を学び、地域で実践されているサービスについての理解を深めていく。
地域リハビリテーションⅡ	15	3年	菊地 裕美	理学療法士として5年以上の経験に基づいて、地域リハビリテーションの中で、理学療法士が行う実践活動を見学する。また、グループワークを通して、模擬症例に対する介護保険サービスの利用を考え、知識を整理する。